

展勝地風土記

Vol.33

令和2年10月23日

展勝地開園100周年記念事業実行委員会
問い合わせ／北上市都市整備部都市計画課 ☎72-8279

展勝地開園100周年記念事業実行委員会へ、100周年に向けた取り組みとして、より多くの市民に展勝地を知っていただくため、展勝地に関するさまざまな情報を紹介しています。歴史的事実、地理的事実、自然環境のこと、そして、展勝地に深く関わった人々や展勝地を題材にした美術・文芸作品などについて紹介していきます。次回は令和3年1月22日に発行します。

『北上河畔で

展勝地とともに』

(有)枕流亭

代表取締役 岡島 親吾

枕流亭という屋号。この「枕流」は、自然の中で自由に生活する意味の中国の故事「枕石漱流」(石に枕し流れに漱ぐ)を、「石に漱ぎ、流れに枕する」と誤用したことを認めず、屁理屈を並べて言い逃れたという故事から生まれた言葉です。そう考えますと屋号としてはいかなるものかと思うのですが、その言い逃れが「流れを枕にするのは、俗事を聞いて汚れた耳を洗いたいと思うからであり、石で口をすすぐのは世俗の物を食べて汚れた歯を磨きたいと思うから」といいますから、当店へお越しになった時ぐらいいは楽しいお話をしておいしいものを食べて俗世間を忘れ幸せな気分を過ごしてくださいねという言葉に聞こえてくるのであります。文豪夏目漱石も同様に自

身のペンネームに使っており、創業期には風流な人たちがいたのでろうと感慨深いものがあります。そんな枕流亭は明治32年創業以来、絶え間なく流れる北上川の流れとともに多くの方にご来店くださり、楽しいひと時を過ごしていただいております。当初枕流亭の昔のお話をする際は、舟運に携わる方々への湯屋とお食事処として賑わいを見せていたとされ、歴史をたど



木造の珊瑚橋の付近で笹舟に乗る人々

ると、東北本線の盛岡までの開業が明治23年、そこから10年ほどしてからの創業というのは、物流の鉄道へのシフトを考えると成り立たなくなっているのであります。実際は東北本線開業後も舟運は続き、完全に鉄道に移行するまではある程度の期間があったものと思われませんが、環境が変われば訪れる人も変わるわけです。舟運に携わる人々から徐々に市街地の方々が、芸者さんをあげて宴を催し、川遊びなどをするような場所として栄えていくのであります。



近代的な構造へと建設が進む珊瑚橋

た鋼材などで強度を持たせるためにこういった型式の橋が主流でした。北上川の流れと珊瑚橋、春は展勝地に桜が咲き誇り、夏には眩しいほどの新緑、秋には紅葉、冬には雪景色と、枕流亭からの眺めは確立されたのであります。

戦後、高度経済成長期には将来の北上市を形作るような話し合いも当店で幾度となく持たれたと聞いております。このころは増築に増築を重ねており、中庭やサロン、洋間や離れのお座敷などがあり、いわゆる料亭の雰囲気を感じ出し賑わいを見せておりました。また、当時は結婚披露宴の会場としても利用され、ご年配の方の中には当店で披露宴を行ったという方もご健在ではないでしょうか。

さて、大正時代に話は戻り、当時の常連さんに沢藤幸治氏という方がいらつしやいました。旧黒沢尻町長であり、和賀展勝会を立ち上げた展勝地には欠かせないキーパーソンです。有志が集い、当店のお座敷で幾度となく会合がもたれ、「和賀展勝地」の計画が練られ



対岸から撮影された大正時代の枕流亭

たと伝え聞いております。計画が出来上がったら必要なのは資金であり、岩手県出身の原敬首相のもとへ陳情しに上京したところ、「そのようなものに予算を付けることはできません」と一蹴されたと言っていたようですが、後に沢藤氏の郷土の未来を創る情熱に次第に協力するようになり、黒沢尻や立花の有志らの支援も取り付け大正10年に和賀展勝地は開園しました。

大正13年、枕流亭は木造二階建てのモダンな建物へ生まれ変わります。そこからの展勝地の眺めは、沢藤氏が思い描いたコントラストを余すことなく再現できる場所として、次第に賑わいを見せていきました。

昭和に入り前述した新珊瑚橋の完成以降、その風景は樹木の成長とともに少しずつ形を変えながらも、現在に至るまで季節ごとの美しさを表現してくれています。

その展勝地の存在があったからでありましょう、当時の枕流亭は大忙し。お膳の上げ下げなどは何段にも積んで、厨房横の急峻なまゝるで梯子のような階段を上り下りしました。まるで曲芸です。下足番も次から次へと履物を預かって

は番号札を渡し、三味線を抱えた芸者さんがいそいそとお座敷へ急ぐ姿もありました。

当時の賑わいを象徴する話として、枕流亭には「自動車部」というものが存在しました。アメリカのフォードやイギリスのアストンマーチンなどの車両を購入し、乗合バス事業やタクシー事業も行っていたのです。当時の写真には北上駅で客待ちをする姿や、交通安全パレードに参加する様子なども記録されています。

時は流れ、次第に賑わいは市の中心街へ流れ、枕流亭の賑わいも影を潜めていくこととなりますが、そのころ青柳町で「天ぷら辰美」を営んでいた4代目芳明が一念発起し平成5年に枕流亭は、誰でも気軽に立ち寄ってもらえるよう



輸入車で乗合事業を行う枕流亭自動車部

料亭のスタイルから宴会場のある和食レストランへと変貌を遂げます。料理のスタイルも川魚中心から、四季折々の食材をさまざまに調理法で提供する形に変化。「天ぷら辰美」の時代から受け継ぐ、しっかりとカラッと揚げる天ぷらは今も健在です。

そして、現在は5代目親吾が切り盛りする枕流亭。このコロナ禍において多くの方が気にかけてくださっていることに改めて気が付き、感謝の念でいっぱいになります。枕流亭には多くのファンがいてその方々に支えていただいております。昔もこれからも展勝地とともにあり続けていきたいと思っております。

筆者プロフィール

岡島親吾

1969(昭和44)年生まれ。枕流亭5代目店主。

店を切り盛りするかたわら、調理師会メンバーとして食によるまちおこしに取り組む。「北上コロッケ」の開発から普及まで精力的に関わり、ご当地グルメとしてB-1グランプリ出場まで押し上げた立役者。